



ボランティアなどを対象にした救急法研修。身近なけがや病気に対する応急処置を学びます。

セブ通信

フィリピン・セブ島北部地域保健
衛生事業の現場から

vol. 6

2017. 3. 14 田村 由美

地域住民の手で健康を向上させるために

セブ島北部では、フィリピン赤十字社（以下、フィリピン赤）の研修を受けた人たちが、ボランティアとして地域保健活動に取り組んでいます。日本の看護大学の地域保健の講義や実習をギュッと凝縮したような3日間の研修を受講し、ボランティアは地区視診やアセスメントを行って地域の健康問題を考え、健康教育を行って地域保健の改善や向上を目指します。

ある村で開かれた健康問題を話し合う集会の様子を見に行った時のことです。集会も終盤に差しかかったところで、1人の村人がマイクを手に話し始めました。

「薬が欲しい！」

「風邪をひいても、この村の診療所には薬が1種類しかありません。この薬を飲んでも効かなければ、街の薬局に薬を買いに行かなければならないんです。でも、私たちには街に行くための交通費も薬を買うお金もない。薬を買いおうと思えば、お金を稼ぐところから始めなければならないんです。私たちに薬もお金もないんです！」

集会の様子を静かに見守っていたフィリピン赤職員のファイサは、マイクを受け取りしっかりした口調で話し始めました。「この事業では、お金や物は配りません。お金や物を配るのではなく、ボランティアの皆さんや村の住民の方々に知識や技術を得ていただくことによって、地域の保健状況を改善することを目指しています。ボランティアの皆さんの活動を通して、皆さん自身が病気や重症化を予防できる力を得ることこそが、この事業の成果なのです。」

今こそ、先を見据えた地道な活動を

極端に言えば、お金や物は配ったものがなくなってしまうばそれでおしまいです。ですが、身についた知識や技術は、事業が終わった後も効果を発揮し、人から人へ伝えていくこともできます。

災害が起きたとき、一定期間は壊れたものを修復したり新たな物を提供したりすることも非常に大切なことです。災害により失われた人々の生活基盤を立て直すために必要だからです。村を訪れると、どの村でも真新しい診療所や集会所を目にします。診療所には、新しい体重計や血圧計、救急箱があります。それらの建物の壁や備品には、政府やさまざまな団体のロゴが張られており、外部からの支援を得て整備されたものだということが分かります。

このような設備を活用していくためには、知識や技術が必要です。ハードとソフトの両面をバランスよく支援することにより、地域保健はさらに改善していくはず。

2013年11月の台風ハイヤンの被害から4年以上がたち、住民自身の努力やさまざまな支援によって地域は平穏を取り戻し、数々の援助団体は事業を終了したり引き継いだりして引き上げました。このような変化の中で、支援する側も村人も、少しずつ変わっていくことが求められています。人々の意識を急に変えることは難しいですが、住民の手による地域保健活動の大切さを根強く繰り返し訴え続けていくことが必要だと感じています。



新しく建て替えられた診療所

診療所の壁のプレートを見ると、台風ハイヤンの被害の後に新しく建てられたものであることがわかります。看護師や助産師は常駐しておらず、ヘルスワーカーと呼ばれる職員が交代で診療所を開けています。医療職が常駐していないからこそ、住民が自らの手で健康を守る活動が大切です。



事業計画の見直し

事業が始まってから1年が経ち、2年間の事業は折り返し地点を迎えました。過去1年間の活動を振り返り、成果と課題に基づいて今後の計画を修正するための会議が行われました。